

自由作文を取り入れたドイツ語授業の試み

ドイツ語担当非常勤講師 河田 章子

Die Einführung der Aufsätze in den Deutschunterricht

KAWATA Akiko

Es ist sehr bedauernswert, daß die Studenten mit der Zeit immer weniger Interesse und Lust zeigen, Deutsch zu lernen. Dieses Semester habe ich eine neue Methode versucht, um die Situation zu verbessern. Ich habe die Übungen eingeführt, auf deutsch auszudrücken. Ich habe auch versucht, das Verständnis der Grammatik dadurch zu vertiefen, daß ich die Studenten auf die Übungen vorbereitete. Die Studenten wurden ein bißchen aktiver beim Lernen und zeigten mehr Interesse an Deutsch.

Das Problem dieser Methode ist die fehlende Landeskunde. Es gibt natürlich viele andere Möglichkeiten des Unterrichts. Ich schlage vor, daß man Deutsch als Mittel des Ausdrückens hält, wenn man den Unterricht reformiert.

1. はじめに

大学の第二外国語としてのドイツ語を担当するようになって20年近くになる。

「何を」というより「どのように」にいろいろな方法が考えられるのが一般に語学授業の特色であろうが、その間をふりかえると私も「どのように」について、自分なりに試行錯誤を繰り返してきた。

毎年とても残念でつらい気持ちになるのは、大学に入学したばかりの新一年生がガイダンスを受けに教室に集まってきた時に感じられる新しい語学を学ぼうとする意欲が長続きせず、「仕方なく」「単位のために」学んでいるように見える学生が次第に多数派になり、授業の活気も失われてくることである。

一方、語学の習得には、学習者の実践が決定的に重要である。まして現在の大学の時間数で第二語学を習得するためには、学生の自主的な学習が必須である。意欲の低下は、学習不足を招かざるをえず、それがさらに意欲を低下させる。

何とかして学生たちに興味を持たせ、楽しく活気あ

る授業をすることができ、しかも必要な事柄は確実に教え、学生が力をつけるようにしたい、これが毎年教師として悩む点であり、自分への課題なのであるが、そして毎年何らかの工夫は加えるものの、満足のいく段階には容易に到達しないのが現状である。

特に、会話を扱うA2、A4とは異なり、文法を中心とするA1、A3では、教えるべき文法事項の量は決して少なくないので、学生の意欲低下を感じながらも文法の説明や練習に追われてしまうのが実状であった。

ここでは、ここ数年の授業のまとめのような形で97年度後期にドイツ語A3（前期はA1）で行った試みについて報告したい。ドイツ語授業の最終的な形、完成されたものなどでは決してなく、非常にささやかな試みに過ぎないが、授業の形のひとつとして報告し、先生方のご意見、ご批判を仰ごうとするものである。教養的科目の中の語学の現状や、一般総合教育の改革についての研究や論議に何らかの参考になるところがあればと思う。

2. 試みた授業法の背景

他大学も含めたこれまでの経験で、文法の授業で行って見たのは、教科書として文法だけではなく、読章も含まれているものを用いることである。授業が、説明と練習の繰り返しの陥らないように、受講生が場面のイメージを持ちながら楽しく学べるようにという意図であった。日本の学生がドイツを訪ねる、またはその逆の設定で、会話も含みストーリー性のある読本を文法のクラスの教科書としてなんとか用いた。このような教科書を使うことは授業の雰囲気を変え、学生の興味を引き出すのにある程度の効果はあったと思う。

しかし、一般的に現代の日本の学生のドイツについての知識は断片的なものであり、その社会や文化への興味、関心はそれほど大きいとは言えない。もちろん、学生の興味をどう引き出すかは教師の力量や努力次第であるとも言えるのだが、異文化間の交流を描く教科書を用いることだけでは、学生達の興味が教師の期待する程度にまでなるのはむずかしい。またストーリーのある教科書を用いると、読章に一定の時間を割かざるをえず、文法の説明に影響するという問題もあった。

このような経緯から、何か新しい方向はないだろうかと探っていて、今年度後期に試みたのが自由作文を取り入れることである。

最近の何年間かで使用した教科書に、和文独訳ではない、自由に文を作る自由作文の課題が時おり出てきたのだが、それらには、自己紹介、ふるさとの紹介、またははがきをドイツ語で書いてみようというものがあった。

それらを授業で何人かの学生に分担させて取り組ませてみるうちに、この課題は学生達の意欲を引き出し、実力をつける上で効果が期待できるのではと考えるようになった。

そして2年前からは、定期試験にも自由に文を作る問題をひとつ入れることにし、その内容は学生にあらかじめ知らせ、試験の前に準備しておけるようにした。旅先から友人へ宛てたはがきの形の文、英語の仮定法に似た、接続法Ⅱ式を用いた、「もし…だったら…だろうに」という短文を2、3作る問題などがその例である。

後者の問題の作文には、若々しいセンスにあふれたもの、内容的にすぐれたものなど、印象に残るものはいくつかあった。特に後期の試験ではその内容について学生に評価を伝えるような機会はもうないのであり、採点するだけになるのはもったいないことだと思った。

そしてそもそも自由作文がよいものであれば、もっと授業の中へ取り入れてみればと考え、今年度後期は自由作文を中心にした授業計画をたて、文法の説明もそれと関連づけて行うことにした。教科書は前期のものを引き続き用いたが、後期の後半には副読本のような使い方をした。

3. 授業の経過

実際の授業の内容を経過にしたがって述べて次のようになる。

後期の初日、ガイダンスの日、後期の授業計画のプリントを配布し、授業に自由作文を取り入れる予定を発表した。後期の終わり頃に、「私のふるさと」（または「私の金沢案内」）、「もし…だったら」のどちらかの作文を提出することとした。二種類にしたのは、好みにしたがって選択できるほうがよいと考えたのと、学生の中には個人的なことを出したくない人もあるかと考えたためである。

そして、後期の定期試験の問題のひとつとして、友人に宛てたはがきの文を書く課題を出す予定であることも伝えた。

作文の具体的なイメージがもてるように、「私のふるさと」については、二年前担当したクラスの学生の書いたものを二例選び、「もし…だったら」の方は、「もし私が日本の首相だったら」「お金がたくさんあったら」という例文を作ってプリントしたものを配布して簡単な説明をした。

これまでこのように早く課題を発表したことはなかったが、課題を先に知っていることは学生にとって学習の動機づけとなり、意欲がわくのではないかと、「使おう」という姿勢で向かうことで、能率のよい、ポイントをおさえた学習ができないかと考えた。

テンポの速い時代を反映してか、現代の学生達は、すぐれた面も持っているが、一般的に遠い目標に向かっ

て根気強くやるというのは、一昔前より少し苦手になっているように見受けられる。

このような場合、「じっくり勉強して、力がついたら作文を書いてみましょう」という長期型より、「作文を書くために必要なことを勉強しましょう」と、短期の目標を与えて、それを達成させていくやりかたの方が、意欲を引き出すのには適しているように思える。

短期の目標が小さく見えても、それで意欲が出れば学習が進むわけであるし、短期の目標も繰り返せば長期になるのだからと、このごろ考えるようになった。

その後の授業の経過としては、後期の前半は教科書を中心とした従来のやり方で、前置詞、話法の助動詞、三基本形、現在完了などを扱った。後半は、「私のふるさと」の参考用に金沢についての文、歴史のある、伝統的な町であることや、兼六園のことを紹介した、15行ほどの文と、尾山神社、近江町市場など、いくつかのみどころを説明した短文を作り、それに、学生が自分で文を作る時に必要となりそうな語彙、例えば「…がある」「…で有名である」「…が行われる」などを加えたプリントを作成して配布した。

それらの例文で用いられている文法項目は、比較、受動態、関係代名詞、接続詞で、それらはまずプリントの例文で説明してから、教科書で確認し、補足する方法をとった。例えば「兼六園はたくさんの観光客に訪ねられる」という文で受動態を、「渚ドライブウェイはその上を車が走ることができ、また許されている海岸として有名である。」の文で関係代名詞を、「白山は立山ほど高くない」の文で比較を説明した。

そして年内の最後の授業で、もうひとつの課題である、「もし…だったら」の参考用プリントを配布した。「私のふるさと」を選ぶ人と分量的に平等になるように、文を三つ作ることにし、第一は「もしたくさんのお金があったら」という仮定部に結論を続ける、第二は「もしあればいいと思うもの」というテーマで、少し前に学習した関係代名詞を使って文を作ることにした。「未来へも過去へも飛んで行けるマシン(タイムマシン)があればなあ」などを例文として出した。そして第三は非現実話法の文なら自由に作ってよいことにした。

この二つの作文のどちらかを選び、1月の二回の授

業のうち、できるだけ第一回に提出するようにと伝えた。

受講登録者は57名であったが、1月の第一回の授業で、「私のふるさと」を30人が、「もし…だったら」を13人が提出した。この数は予想より多く、指示していた分量よりはるかに多いものも(中にはレポート用紙2枚のものも)あった。もちろん文法的誤りは少なくないいわゆる日本語的発想の文も目立ったが、この作文の準備、そして書くことそのものは、やはり学生にとって勉強の機会になったのではと思った。数が多いので大変ではあったが、誤りを訂正して、二回目の授業(今年度の最終授業)で返却し、全員の文から少しずつ抜粋して作ったプリントを配布した。「私のふるさと」は、地理的に北から順に文を並べてみたが、学生の出身地がさまざまなので、なかなかおもしろいものになったと思った。

4. 学生の評価

この授業法について年末にアンケートを実施した。作文を提出する前だったので、学生は少し実感が湧かない面があったかもしれない。匿名で行い、回答数は41だった。

第一の設問、「後期は自由作文を取り入れ、文法の説明もそれと結びつけて行ったりしました。このことで、あなたのドイツ語への興味は増したと思いますか？」に対して、答えは

増した 8 減った 1 変わらない 25
わからない 6 であった。

この試みは、作文そのものの学習だけでなく、学生の意欲が増すこともめざしていたのだが、興味が増したと答えた学生は多くなかった。ただ、教壇から見ると顕著などとは言えないが、教室に少し活気が出てきたという程度の変化はあったように思えた。

次の設問「そのような試みをよいと思いますか？」に対しては

よいと思う 27 よくないと思う 0
どちらでもない 10 わからない 3
という答えであった。

次に「よくないと思う理由は何ですか？」の問いに、

1) その時間を文法の説明に使う方がよい 2) ドイツについての読章などをする方がよい 3) その他の選択肢を挙げたところ、第二の設問にどちらでもないと答えた人の内、二人が1)を選んだ。理由として1), 2), を予想したが、2)を選んだ人はいなかった。

5. この授業法の意義, 長所

正確には意義, 長所と言えるほどのものではなく、私がこの授業法に対して期待している点と言う方がよいかも知れないが、いくつか挙げてみたい。

まず第一には、ドイツやドイツ文化への興味が大きいと言えない場合でも、身近なことをドイツ語で表現することによって、ドイツ語を身近なものに感じさせ、親しみを持たせることができる。

また、初めて学習した外国語で、つたないものでもあっても文を作ったということで、達成感やおもしろさを味わうことができる。

もう一つは、言語というものについて考えさせる機会にいくらかなるのではないかという点である。例えば、自己紹介を現在形と、過去のできごとや体験を伝えることを現在完了形、過去形と関連づけることで時称を学んだり、人間が、現実でないことを仮定したり、空想したことを表す時に使われるのが接続法である、ととらえたりすることは、言語による表現の仕方を考えることから、文法にも少し広い視野を与えてくれないだろうか？

最後に、学生の気質と関連することであるが、受講する学生を見ていて気づくのは、「正解」を非常に気にかけることである。私の訳と違っていても正しければよいのだと説明しても、教師がつける訳をノートにとり、覚えようとする学生も多い。いつの時代でも、試験や成績は学生にとって重大事であるので、無理もないのかも知れないが、受験勉強や〇×式テストの影響も確かにあるように思える。

教科書の文が問題で、訳が答えであるようにとらえるのでは、語学の本質から外れることになり、語学を学ぶおもしろさは十分には味わえないだろう。

自由作文を取り入れただけで、このような傾向を改

められると言うつもりは全くないが、このような、正解のない、一人一人が作り上げる課題が、学生にとって新しいものに触れる機会になればという思いもある。

また一方では、個人差はあるが、現代の学生は自分を表現することには、一昔前よりずっと積極的に上手であるという一面も持っている。その点からすれば、自由作文は能力を生かせるものかも知れない。

6. この授業法の短所, 問題点

大きな問題点と言わなければならないのは、この方法では、言わばドイツ語とドイツのつながりを切り離し、身近なことを表現する手段として、ドイツ語を扱うため、「ドイツのことを知りたい」という学習者の要望に答えることがどうしても不十分になることである。

前に述べたように、学生のドイツへの関心は教師の期待ほど大きくなく、アンケートでもドイツについての文を読みたいという声はなかったが、やはり、このような要求は、潜在的な形ででも、学習者の内に存在していると思われる。「ツークシュピッツェはユングフラウほど高くない」という文は確かに先の「白山は立山ほど高くない」と比べて身近でないが、だからこそ人の興味を引く面もあるわけである

2年生以上を対象とする授業ならば別だが、初級Aの授業で自由作文だけを内容とするのは、やはり不適當で、教材や、教師の話でドイツ紹介の面を補う必要があると思う。

さらに実際的な問題点としては、教科書以外のことをすることで、負担が大きくなり過ぎないようにする必要があるのである。アンケートで、文法の説明をもっとする方がよいという声があったが、作文をすることが、文法の理解にマイナスになるのではなく、プラスに働くようにしなければならない。

また作文を書くことが、あまり難しくなり過ぎないように配慮する必要がある。和独辞典などを用いなくても、学習した文などから思いついたり、応用したりして自然にドイツ語で表現できればよいが、実際は、ある程度の語彙力も必要である。今回は利用できそうな語彙をプリントに載せたりして補ったが、この点の工夫も課題のひとつである。

上の二つの課題は、文法事項と語彙、作文を結びつけた教科書、教材を準備できれば、かなり解決するだろう。

7. まとめ

まず、個人的な体験について述べると、ドイツ語教師になってまもなく、語学研修を受けるため、当時の西ドイツに2か月滞在した。電車に乗っていると、乗り合わせた乗客から話しかけられることが時折あった。

自分のドイツ語で話ができただけはうれしく、何よりも旅の思い出になったが、一方でそれは自分の力のなさ、勉強不足を思い知らされる機会でもあった。語学的な面でもあるが、問題は話すことがらである。外国では自分がまるで日本の代表になったように感じるもので、特に話題が社会情勢になると答えなければと焦りながら、何をどう言えばいいのかわからないのである。また何か言えたとしても、相手との対話によってそれを展開させることはさらに困難だった。日本人の討論べたはよく指摘されるが、私も力量不足を痛感した。

今、教師として学生に対していて、自分の経験と反省から、めざすべき目標として、心の中においてのは、彼らが、かつての私のような立場に置かれた時、自分の考えを適切に相手に伝え、相手と交流できるようなドイツ語の力を身につけさせたいということである。先ほどの例のような、電車の中で現地の人と会話をするような場面で、文法だけでやっていけないのは

もちろんだが、一方、文法や読解力も要求されるのであり、そこで働いているのは、いろいろな力を合わせた、「ドイツ語を使う力」とでも表すことができる総合的な語学力であろう。広くは、そこにさらに知識や教養も含まれるだろう。

ドイツ語Aは、A1, 3とA2, 4に分けられ、前者は文法を中心に、読み、書く力を、後者は会話を中心に、聞く、話す力を養うものと特徴づけられている。この二つのクラスが、働き合ってめざしているのも、この総合的な語学力であろうと思う。

A1, 3の授業で、文法や読解が重要であるのは言うまでもない。具体的に言えば「辞書を使ってドイツ語文が読める」というのが、このクラスの目標であると言ってもいいのではないかと思う。しかし、今回のような練習を行う場合でなくとも、文法や読解を扱う場合でも、総合的な語学力を養うという視点を持っておくことは、意味のある、有効なことではないかと思う。

特に現代の国際化の流れや、大学の大量化などを考えれば、語学の授業も変わっていく必要があり、教師の側も、より実地的な、わかりやすい授業が求められるのではないかと思う。

語学の授業をどのように進めるかには、さまざまな「いかに」が考えられるだろう。今回の私の試みは、その中のひとつに過ぎず、まだ問題点も多い。諸先生方のご意見、ご指導を仰ぎ、今回の試みを検証し、授業のありかたについてさらに考えてみたいと思っている。